

# 大学事務職員の役割

## —大学教育学会課題研究集会に参加して—

首都大学東京管理部長  
小澤 達郎

来年度、本学が大学教育学会大会の幹事校となることもあって、12月6日、7日に岡山大学で開催された同学会課題研究集会に参加しました。

岡山大学は、広い敷地に教育・研究施設がゆったりと配置され、緑も豊かで、落ち着いて勉学に集中できる恵まれた環境にあると感じました。

集会で実施された多くのプログラムのうち、特に印象に残ったものを、若干の感想を交えて報告します。

まず、岡山大学が開催校として企画した特別シンポジウムは、集会の統一テーマ「学生の主体的な学びを広げるために」に沿って活発な議論が行われました。岡山大学教育学部の学生からは、「学生が主体的な学びができていないと指摘されているが、我々は世間で非難されているほど学ばないわけではない」との発表があり、さらに、「大学の實力」という全国調査を行った読売新聞東京本社の松本美奈記者、近年その教育に高い評価を受けている京都市立堀川高校の荒瀬克己校長、大学が「学校化」されたといわれる中「主体的な学び」を発議した岡山大学教育開発センターの橋本勝教授から次々と学びへの提言がなされ、フロアの参加者とともに活発な議論がされました。

シンポジストとして学生も加わり、フロアからも学生が積極的に発言し、興味深いものがありました。ただし、大学のユニバーサル化のもと、マジョリティとしての一般学生を主体的な学びに誘うにはどうしたらよいかについては、十分に咀嚼されなかったような印象があります。

2日目のプログラムの中では、「『大学人』能力開発に向けて—国立大学の現在—」と題するシンポジウムが興味を引きました。

シンポジストとして、東京大学の貝田綾子氏、山形大学の山崎淳一郎氏、京都大学の山本淳司氏から、それぞれの大学における大学改革と職員の取組について報告があり、最後に東北大学の羽田貴史氏から、総括的な問題提起と大学職員論の展開がありました。

各大学の取組については、非常に先進的な内容を含み、大いに参考になると思いました。各報告について、私なりに共通点を抽出すると、次のようになります。

(1) 危機意識を共有すること。

大胆な改革に取り組む背景としては、大学が直面する危機を認識し、それを学内で共有していることがあります。一般的には、大学の法人化に伴い、「経営」の問題に直面したこと、大学教育の質の保証など教育改革の必要に迫られたことなどがあげられます。山形大学では、入試判定の過誤が判明し、大学としての信用が失墜し、存亡の危機に晒されたことが改革の端緒となりました。

(2) 改革を進める核となる部署を作ること。

大学改革は、教職員の別なく、全学一丸となって行わなければなりません。それを進める頭脳、司令塔の役割を担う組織が必要です。

(3) トップの姿勢が大事であること。

大学のトップが改革について情熱をもち、上記の司令塔組織と直結して、良い意味でリーダーシップを発揮しています。

本学においても改革のための施策が様々に取り掛かれています。今後とも、改革を組織的、継続的に進めるためには、ここに触れたような他大学の取組が大変参考になると思います。その際、留意する必要があると思われるのは、①本学の直面する課題を正確に認識し、教職員全体で共有するよう様々な機会を設けること、②教員と事務職員との関係、役割の相違について、改めて整理すること、の2点です。教員と職員との協働の必要性は、いわずもなですが、その具体的内実については、なお考える余地があるように思います。